

保育現場における児童文化財のあり方を考える：

絵本の自伝的記憶を手がかりとして

森野美央（長崎大学教育学部）・田中絢香（佐賀整肢学園からつ
医療福祉センター）・宮津寿美香（長崎大学教育学部）

問題と目的

保育現場における児童文化財

児童文化財は、大人が子どものために創作したものであり、保育現場では、児童文化財を用いた保育が実践されている(千古, 2016)。児童文化財には様々な種類があるが、物的に創りだされた有形文化財(児童図書、玩具など)と、技巧的に表現された無形文化財(演劇や音楽など)に大別される(林ら, 2019)。

齊木(2018)は、児童文化に関連したテキスト類を調査し、有形文化財である絵本などの文学や児童出版物が主流となっていること、また、絵本は、保育内容において、領域「言葉」のみにとどまらず、5領域全てを包含した児童文化財となっていることを報告している。

絵本は、どの保育現場でも目にする児童文化財であり、現行の各要領や指針にも明記されている。たとえば、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「言葉」には、満1歳以上満3歳未満の内容(4)「絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。」や、満3歳以上の内容(9)「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」という項目がある。満3歳以上では、内容の取扱いにおいても、(3)「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」、(4)「園児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどを通して、言葉が豊かになるようにすること。」といった記載があり、保育者には、絵本と子どもの育ちをつなぐ役割が求められている。

しかし、保育現場を対象とした先行研究からは、各要領や指針をもとに、明確な見通しをもって、絵本と子どもの育ちをつなぐ保育が展開されているとは言い切れない現状が伺える。金丸(2011)は、領域「言葉」について、他領域に比べると、年間指導計画への記述数が最も少ないなど、多くの問題点や課題が指摘されていることをふまえ、ほとんどの園で毎日取り上げられる絵本に着目し、モデルカリキュラムの現状と課題を検討している。その結果、モデルカリキュラムにおいて、「子どもの姿」の項目に絵本に関する記述はほとんど見

られず、カリキュラムが現実の保育実践と乖離していると言わざるを得ない状況であること、保育現場で見られる子どもの姿を具体的にカリキュラムに反映させ、保育実践の一つひとつが丁寧に取り上げられるモデルカリキュラムの作成が求められることを報告している。また、片桐（2019）は、実習生が捉えた保育現場の絵本環境の現状について分析し、実習中に、読みきかせの環境や読み方、絵本の選び方や並べ方について指導を受けた学生がいる一方で、何も指導を受けなかった学生がおり、保育現場が絵本環境を有効に活かしきれていない可能性を指摘する。

絵本は、どの保育現場でも目にする児童文化財でありながら、「子どもの姿」との関連づけが十分でなく、また、見通しをもった取り入れ方も十分になされていないのである。このような背景から、本研究では、絵本にかかわる「子どもの姿」を明らかにし、保育現場における絵本のあり方を考える材料を提供することを目的とする。

絵本と自伝的記憶

絵本にかかわる「子どもの姿」を明らかにするため、今回は自伝的記憶を手がかりとする。山本ら（2010）は、自伝的記憶を、「過去の自己にかかわる出来事の記憶であり、アイデンティティの形成に深く関与するもの」とし、青年を対象に、絵本を手がかりとして想起された自伝的記憶の分析を行っている。その結果、絵本を読んでもらった時の状況にかかわる想起率は8割を超え、5歳時の自伝的記憶が最も多く収集されたこと、6歳以下では「人」を中心とした内容が多いことが明らかにされている。

想起された内容を見ると、「人」では、絵本を読んでもらった他者の様子が浮かぶようなエピソードがあげられており、また、「人」以外にも、絵本が本棚のどの場所にあったか、絵本の中の絵や話の内容、更には読んだ時の感情など、多種多様な内容がいずれも詳細なエピソードとなってあげられていることが伺える。想起率の高さに加え、想起内容も鮮明であることをふまえると、記憶の中の絵本について問うことは、幼少期における絵本について、当時のみならず、長期的にどのような形で影響を残すものであるかを知る有用な手がかりとなる可能性がある。

一方で、山本ら（2010）の研究は、幼少期の自伝的記憶の特徴を明らかにすることが目的であったため、たとえば、絵本の何がどのように記憶に残るのか、他者に読んでもらった記憶が残っている人と残っていない人とで絵本の記憶にどのような違いが見られるのか、など、絵本にかかわる具体的な部分については、ほとんど明らかにされていない。

本研究は、山本ら（2010）よりも一歩ふみ込んだ調査と分析を行い、絵本にかかわる「子どもの姿」について、詳細を明らかにしようとするものである。

方法

調査対象者と手続き

大学生 252 人を対象に質問紙調査を行い、237 人から回答を得た（回収率 94.0%）。そのうち、幼少期に出会った絵本で一番心に残っている絵本について有効回答を得た 230 人を分析対象者とした（有効回答率 97.0%）。なお、協力依頼は、多種多様な自伝的記憶を広く収集する目的で、文系理系の双方が含まれ、更に男女の比率が同程度となるよう、総合大学 A 学部の学部生と B 学部の学部生に行った。調査時には、協力が任意であることを伝えた。

調査内容

(1) 回答者の属性：年齢と性別を尋ねた。性別は「男性」、「女性」、「その他」の選択肢を設けて回答を求めた。

(2) 幼少期に出会った絵本で一番心に残っている絵本：まず、絵本の題名を尋ねた。思い出せない場合は、題名の代わりに内容や絵などを記述するよう求めた。自力での想起が困難な対象者には、「ぐりとぐら」、「はらぺこあおむし」、「三びきのやぎのがらがらどん」の 3 冊のうち、最も思い出せそうな絵本を 1 冊選ぶよう求めた。この 3 冊は、浅木（2015）にて、ロングセラー絵本 51 冊の中で、大学生の幼児期における読書経験率と保育者の読書経験率が両者とも 90%以上（「はらぺこあおむし」と「ぐりとぐら」）、あるいは、保育者の読書経験率が 90%以上（「三びきのやぎのがらがらどん」）となっていたものである。なお、浅木（2015）では、「おおきなかぶ」も両者の読書経験率が 90%以上となっているが、これは小学校の定番的教材となっていることから、学習時の記憶が混ざる可能性が高いと考え、割愛した。

(3) (2) で回答した絵本に関する自伝的記憶：最初にその絵本に出会った年齢と最後に読んだ年齢について尋ねた後、印象に残っている絵・場面（内容）・読んでくれた人や読んだ時の状況、そして絵本を読んでいる時の気持ち、それぞれについて、自由記述で回答を求めた。

(4) (3) で回答した、印象に残っている絵・場面（内容）・読んでくれた人や読んだ時の状況、の 3 種類のうち、最も思い出しやすかったものを尋ねた。

結果と考察

分析対象者 230 人（A 学部 112 人・B 学部 118 人、男性 126 人・女性 103 人・未回答 1 人）の平均年齢は 18.4 歳であった。

幼少期に出会った絵本で一番心に残っている絵本に出会った年齢

最初にその絵本に出会った年齢と最後に読んだ年齢について、平均年齢を調べた結果、前者は 4.50 ($SD=1.60$) 歳、後者は 8.81 ($SD=4.14$) 歳となった。最初にその絵本に出会った年齢については、山本ら（2010）において、5 歳時の

自伝的記憶が最も多く収集されたという結果と重なる部分がある。また、一番心に残っている絵本は、初めての出会いからしばらく経った後も読み返されることがあり、その場合は、児童期が中心となることが分かった。

幼少期に出会った絵本で一番心に残っている絵本

230 人の回答を集計した結果、5 人以上があげていた絵本は、「ぐりとぐら（54 人）」、「はらぺこあおむし（48 人）」、「三びきのやぎのがらがらどん（9 人）」、「100 万回生きたねこ（7 人）」であった（全体の 51.3%）。

なお、「ぐりとぐら」、「はらぺこあおむし」、「三びきのやぎのがらがらどん」のいずれかをあげた回答者 111 人のうち、45 人は、幼少期に出会った絵本で一番心に残っている絵本を尋ねた時点で題名を記載していた。残りの 66 人は、自力での想起が困難な対象者に向けて設定した選択肢を通じた回答であった。

上述の 4 冊以外をあげた 112 人（全体の 48.7%）の回答内訳を、表 1 に示す。内訳は、「題名が記載され、筆者らも絵本を特定できた回答」が 76 件、「題名らしきものが記載されているが、筆者らの側では絵本の存在を確認できなかった回答」が 9 件、「題名や筆者名が一部記載され、筆者らが絵本を推定し、特定可能であった回答」が 5 件、「題名や筆者名が一部記載されているが、シリーズ絵本など、推定や特定が困難であった回答」が 9 件、「手がかりが内容記載のみであり、絵本の推定ができなかった回答」が 13 件となっていた。

幼少期に出会った絵本で一番心に残っている絵本について、230 人全ての回答を合わせると、自力で題名を想起できた場合が全体の 56.5% (130 人)、また、選択肢などの手がかりがあれば想起できた場合が全体の 28.7% (66 人) となっており、大部分を占めることが分かった。一方で、割合は低いですが、想起できる内容が断片的で、かつ題名や筆者名の手がかりもない場合は、想起者自身が後に思い出に残る絵本を読み返そうとした際、絵本の特定が困難な状況に陥る可能性が高いと考えられた。

表 1 112 人の回答内訳

	題名記載	題名や筆者名を一部記載	内容記載のみ
絵本特定○	76	5	0
絵本特定×	9	9	13

想起しやすい内容

一番心に残っている絵本について、(1) 絵、(2) 場面（内容）、(3) 読んでくれた人や読んだ時の状況、の 3 種類について記載を求めた後、最も想起しやすかった内容を尋ねた（2 種類記載されている回答と無回答を除き、219 人分の分析となった）。その結果、図 1 に示す通り、絵という回答が半分を占め、次いで場面（内容）、読んでくれた人や読んだ時の状況、となった。

絵については、たとえば、「黄色く大きなカステラの絵。(ぐりとぐら)」、「あおむしが食べ物を食べていくところがカラフルできれいだった。(はらぺこあおむし)」、「表紙の猫の絵が、特に好きだったわけではないがとても記憶に残っている。(100万回生きたねこ)」といった、特定の絵が浮かぶような記述と、「全体的に暗くおどろおどろしい。(三びきのやぎのがらがらどん)」、「動物たちが優しい感じで描かれていた。(どうぞのいす)」、「全体的に水彩や色鉛筆のような淡い色使いで優しい印象があった。(そらまめくんのベッド)」といった、絵本全体にかかわる記述が見られた。

最も想起しやすい内容について、絵という回答が半分を占めるという結果は、絵本ならではの結果ではないだろうか。子どもは、絵を通じて様々な情報を部分的に、あるいは全体的に受け取り、中には、「おどろおどろしい」、「優しい感じ」といった、感情とともに受け取っている場合もあること、更にそれらは青年期まで記憶に残り、想起されることが分かった。

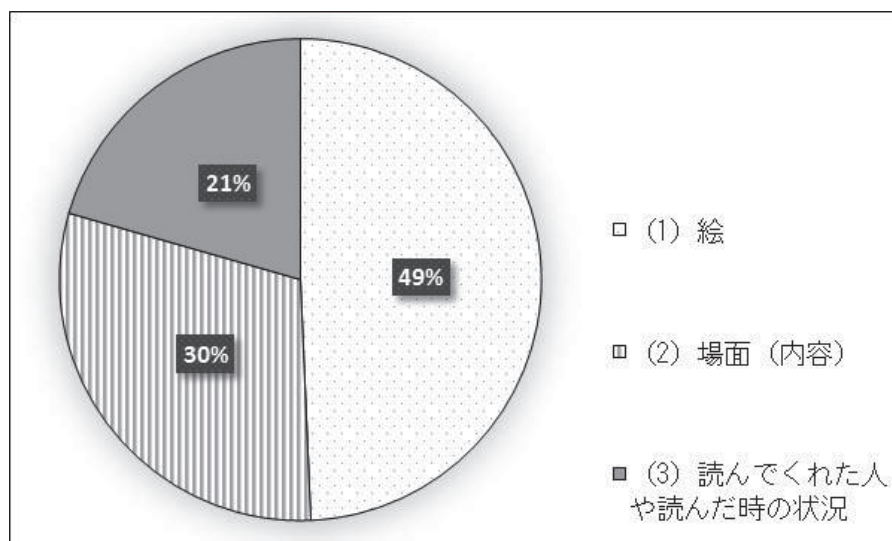


図1 最も想起しやすかった内容 (N=219)

続いて、想起しやすい内容は、その絵本を他者と一緒に読んだか否かによって異なるのではないかと考え、主に (3) 読んでくれた人や読んだ時の状況、についての記述をもとに、たとえば、園で読んでもらった、家族に読んでもらった、など、他者と一緒に読んだ記憶を書いている人(以下、人記憶のある人)と、1人で読んだ、など、他者と一緒に読んだ記憶を書いていない人(以下、人記憶のない人)に分け、最も想起しやすかった内容を調べた。

結果を図2と図3に示す。図2と図3を比べると、人記憶のある人の場合は、(1)～(3)の3種類全てがほぼ3割と、同程度の想起のしやすさとなっているが、人記憶のない人の場合は、そのような傾向は見られず、(1)が最も想起しやすいものとなっていた。

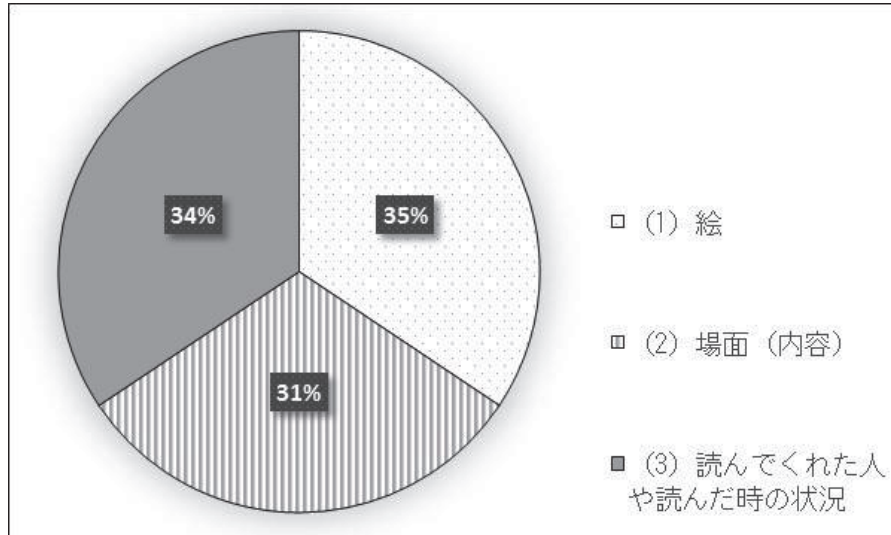


図2 人記憶のある人が最も想起しやすかった内容 (N=96)

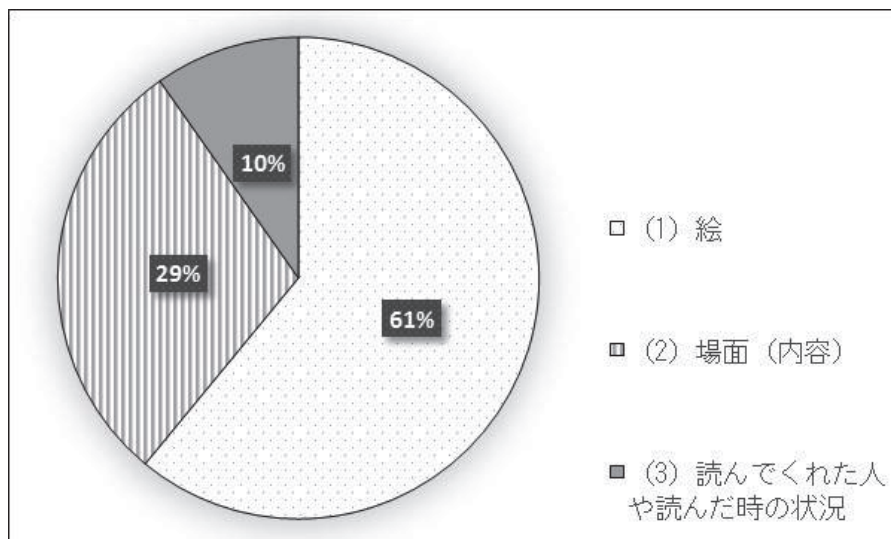


図3 人記憶のない人が最も想起しやすかった内容 (N=123)

(3) について、人記憶のない人にも何らかの記述 (1人で何度も見ていた、など) は見られたが、人記憶のある人に見られた多種多様な記述 (この本が好きで父にずっと毎日寝る前に読んでもらった、祖母の家に泊まったときに必ず祖母が読んでくれていたので楽しみだった、保育園の先生がお昼寝の時間の最初に読んでくれた、など) に比べると、全体的に内容が似通っていた。人記憶のない人は、(3) の記憶があまり残されていない分、絵本ならではの特徴である絵が印象的なものとして残されているのかもしれない。

では、人記憶のある人が、3種類とも同程度の想起のしやすさを感じていたという結果は、どのように見ると良いだろうか。まずは、他者と読むことで、3種類それぞれが満遍なく記憶に残され、青年期になって想起しやすいものが人によって、たとえば性格などで異なるという見方が考えられる。

次に、人記憶のない人の結果と照らし合わせた場合、(1)と(3)の割合が異なるという部分に着目して考えると、先に述べたように、他者と読む場合は、その人とのやりとりを通じて様々な経験や感情が引き出され、それらが心に残りやすくなる一方、他者との相互作用に注意が払われるほど、絵本の絵とじっくり向き合う時間は少なくなり、絵が印象的なものとして心に残りにくくなる、との見方ができるかもしれない。

保育現場では、時折、保育者が短時間で絵本の字面を急いで追いながら読みきかせをし、その絵本を最後まで読み切ることを重視する場面に出会う。しかし、絵に関する自伝的記憶から明らかにされたように、子どもが絵を通じて受け取る情報の多さや、青年期においても記憶に残されている内容、更に、他者と読む場合には、絵本ならではの絵が印象的なものとして残されにくくなる可能性があることをふまえ、日々の実践の中で、子どもが絵本の絵とじっくり向き合う時間や場所をどのように確保するかを考えて年間指導計画の中に位置づけていく必要があるだろう。

想起される感情と他者の存在

絵本を読んでいる時の気持ちが明確に書かれている記述を分類した結果、大別して、ポジティブ感情（楽しさ、嬉しさ、ワクワク、興味、意欲など）、ネガティブ感情（悲しみ、心配、恐怖など）、そして、どちらにも入らない感情（驚きやお腹が減ったことへの気づきなど）の3種類があると分かった。

想起される感情についても、想起しやすい内容と同様に、その絵本を他者と一緒に読んだ記憶が残っているか否かによって結果が異なる可能性が推測されたため、想起される感情を明記していた195人を、人記憶のある人とならない人に分けて分析を行った。結果を図4と図5に示す。いずれもポジティブ感情が約8割を占めている一方で、人記憶のない人は、人記憶のある人よりも、ネガティブ感情を想起する割合が2倍となっていた。

ネガティブ感情の想起について、人記憶のある人とならない人で違いが生じた理由の一つとして、ネガティブ感情が描かれた絵本と当時どのように向き合ったかが異なるために、違いが生じた可能性があげられる。エピソードを見ていくと、人記憶のない人の中に、「自分で何度も読んでいた。おばけに連れていかれる場面が印象的。怖かった。(ねないこだれだ)」といった記述が見られた一方、人記憶のある人の中に、「母に読んでもらって、最初は怖かったけど、だんだん面白いと感じるようになった。(おいしいのぼうけん)」という記述が見られた。絵本の中に描かれるネガティブ感情は、他者と一緒に読む中で緩和されたり、向き合いやすくなったりするのかもしれない。

想起される感情と絵本を読んだ場所

他者と絵本を読んだ場所が、大勢の他者が周囲にいる園であったか、少数

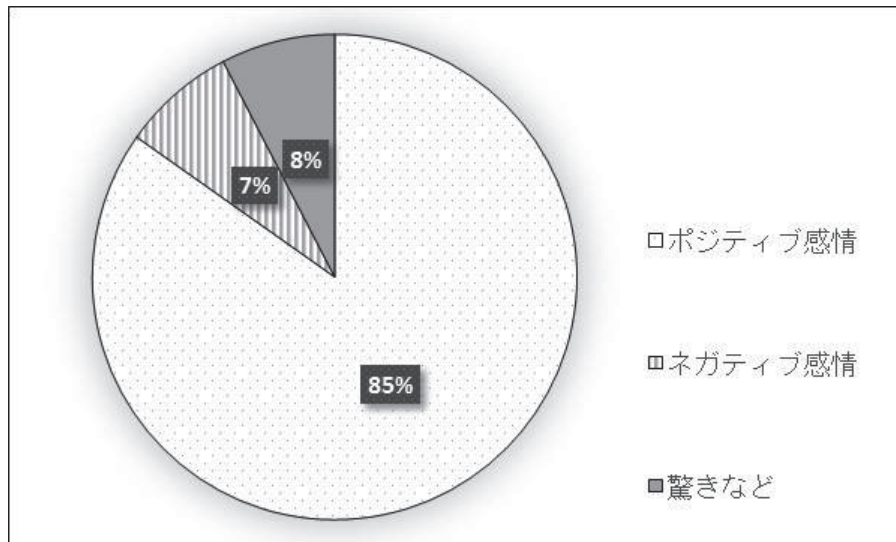


図 4 人記憶のある人が想起した感情 (N=92)

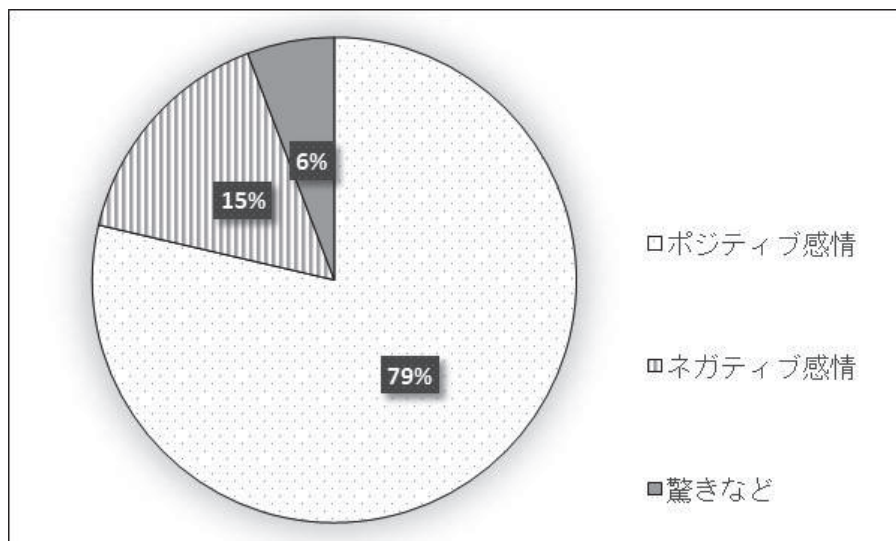


図 5 人記憶のない人が想起した感情 (N=103)

の他者がいる家庭であったかによっても、想起されるネガティブ感情に違いが出るのではないかと推測のもと、人記憶のある人の中で、(3) 読んでくれた人や読んだ時の状況の欄に、園で読んだか、家庭で読んだかが明記されていた 84 人を対象に、絵本を読んでいる時の感情がどのように想起されているかを更に分析した。その結果、他者と一緒に絵本を読んだ場所が、園であっても家庭であっても、ポジティブ感情については想起率が 8 割を超える一方（園 86%、家庭 84%）、ネガティブ感情については、園での人記憶のある人よりも、家庭での人記憶のある人の方が、その想起率が 2 倍となっていることが分かった（園 5%、家庭 10%）。

園では、そもそもネガティブ感情を経験するような絵本が積極的に選ばれていない可能性もあるが、どの場所で他者と読むかによって、ネガティブ感

情が記憶に残る程度が異なるという結果について、もう少し考えてみたい。園での記憶について書かれた内容を見ると、一対多で近くに他者が大勢いるような読みきかせ場面のみではなく、友達と読んだというものも含まれており、単純に、近くに他者が大勢いた方がネガティブ感情の想起が減るのではないかとは言えなかった。そこで、想起内容を園と家庭で比較してみると、家庭では、その絵本を何度も読んでもらっている様子や、読んでくれた人との関係性が浮かぶ記述が多いが、園ではそうした記述が少なかった。

自分にとって重要な他者と何度も特定の絵本を読むことは、絵本に描かれる、悲しみ、心配や恐怖といったネガティブ感情の世界にじっくりと浸ることを可能にし、それゆえに記憶に残されるのかもしれない。

人記憶のある人はどこで読んだ時のエピソードを想起しているか

幼少期に出会った絵本で一番心に残っている絵本を読んだ時の自伝的記憶について、人記憶のある人は、図6のように、家庭でのエピソードを想起した人(N=62)が、園でのエピソードを想起した人(N=22)の約3倍となっていた。家庭の方が想起しやすい、との結果は何を意味するのであろうか。

稲垣(2011)は、「子どもは自分の世界に絵本の世界を取り込み、咀嚼して十分に遊んだ後には、今度はそれを外に向けて他者に提示出来るものに作り変えて発信していく。作られた絵本の世界と現実の世界を行き来しながら、絵本の受け手と体験知を発信する作り手としての体験を通して、自在に自己を織り込んだ新たな世界を創造していく(p.102)」と述べているが、このような経験が、園で叶いにくい状況になっている可能性はないだろうか。

保育者が、絵本と子どもの育ちをつなぐ役割を果たすには、今回明らかにした、絵本とかかわる「子どもの姿」をふまえた年間指導計画の立案に加え、家庭における絵本環境にも学びながら、保育現場における絵本環境を問い直し、

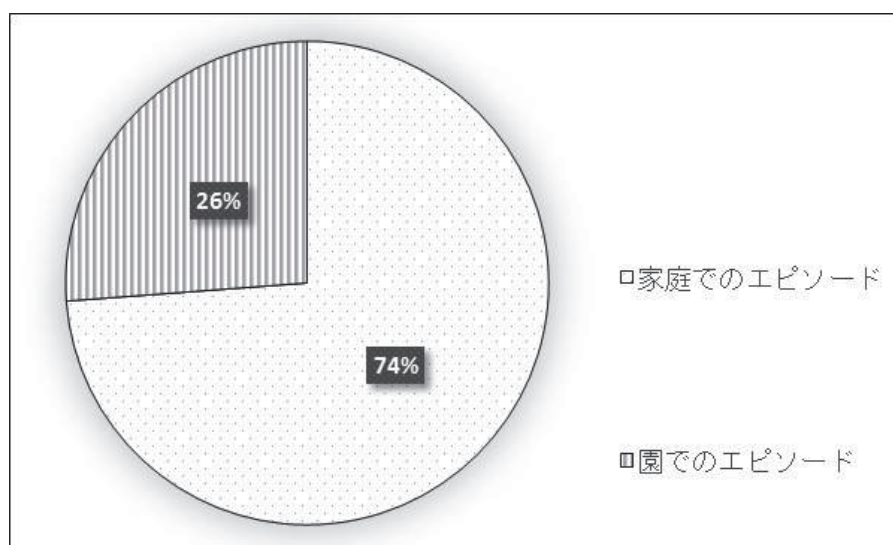


図6 人記憶のある人が想起した、読んだ時のエピソード(N=84)

有形文化財である絵本が真の意味で活かされる保育を考えていく必要があるだろう。

今後の課題

自伝的記憶の形成は、3、4歳以降（山本ら，2010）とされる。本研究でも、一番心に残った絵本との出会いが平均 4.50（ $SD=1.60$ ）歳であったことから、3歳未満の子どもが絵本にかかわる姿については、十分に捉えきれなかった可能性がある。関連して、記憶には残らないが、「今ここ」で重要であることについての検討も今後の課題である。

また、今回は、園よりも家庭における絵本とのかかわりの記憶の方が多く寄せられたことから、今後は、園と家庭、それぞれについて自伝的記憶の想起を求めるなどして、ここで得られた知見を精緻化することも必要である。

引用文献

- 浅木尚実 2015 幼児教育・保育の環境における質的向上への取組み：ロングセラー絵本に関する読書経験調査と園文庫設置の提言 淑徳大学短期大学部研究紀要, 54, 49-62.
- 林 亜貴・藤枝充子・山下晶子 2019 子育て支援活動における児童文化財の活用：ペープサートを事例として 明星大学教職センター年報, 2, 47-56.
- 稲垣 馨 2011 絵本を用いた自伝的記憶の想起課題による循環的な学びの試み 埼玉純真短期大学研究論文集, 4, 101-116.
- 金丸智美 2011 モデルカリキュラムにおける領域「言葉」の分析：絵本に関する記述に焦点をあてて 純真紀要, 52, 75-85.
- 片桐真弓 2019 保育者の専門性としての保育環境に関する研究：絵本環境に着目して 尚綱大学研究紀要 A.人文・社会科学編, 51, 77-91.
- 齊木恭子 2018 児童文化財の活用を考える：「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」における領域「言葉」に視点を置いて 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要, 76, 31-40.
- 千古利恵子 2016 「児童文学」考：保育者に求められる「児童文化財」活用の視点から 京都文教短期大学研究紀要, 55, 125-134.
- 山本晃輔・金敷大之 2010 絵本を手がかりとした幼少期における自伝的記憶の内容分析 教育実践総合センター研究紀要, 19, 47-51.

謝辞

本研究は、第2著者が卒業論文で収集したデータについて、新たな分析を行ったものです。調査に協力いただいた皆様に深く感謝します。また、データ分析に際し、元長崎大学教育学部幼稚園教育コースの神宮麻美さんには、貴重なご助言やご示唆をいただきました。心よりお礼申し上げます。